

前号を読んで

教育と研究の両立

津田和彦

ビジネス科学研究科教授

私が所属するビジネス科学研究科は社会人を対象とした大学院であり、学生の平均年齢は30代後半である。この世代には、まだ感じないが、10年以上に渡り続けている非常勤講師において教えている20代の学生を見ていると、近年、明らかに中高時代の基礎学力の低下を感じる。

一部の私大の工学部では、大学に入学した学生に対して、高校教育で教えている物理の授業を開講しているということをテレビの特集で見たことがある。その中の大学教員へのインタビューで、「教わっているはずの原理を理解していない学生の割合が多くなっている。今後、高等教育で教える項目数の削減が増加すれば、大学で教えるべき事項の教育時間がなくなる。」と言っていたのが象徴的であった。

研究成果には、新規性を求められるため、既存の研究成果を理解した上で、新たな提案・提言を出すことが必要となる。しかし、

基礎学力の低下は、既存の研究成果を理解するにも、多くの時間を要するようになり、その分、新たな取り組みにかかる時間が少なくなるであろう。

一方、自然科学における先端研究は時間と共に進歩し、既存研究は増える一方であり、多くの既存研究を理解しなければ、先端的な研究成果をだせない状況にある。研究のスタート地点である基礎学力は低下し、ゴールである研究成果は更なる高嶺になりつつある今、この差を埋めるべく教育はどうあるべきか？という問題意識を持ちつつ前号を読んでいた。

前号では、「現場から②大学院教育Ⅰ」という特集が組まれていた。これを読むと、各研究科とも、より良い研究成果をあげるために試行錯誤を重ねているということがよく理解できた。日本は今後も高学歴社会が継続し、大学進学率、大学院進学率はますます増加するであろう。このような背景の中、大学院教育においても「現場」からの意見を出し合い共に考える場は、社会を背負って立つ人材育成にとって必要不可欠だと感じた。

教育と研究の両立、大学院に与えられた使命の重さを痛感した。
(つだ かずひこ/情報工学)